

新ベルマーク大使「運命的」「楽しく」「正確な情報」「未来へ」

寺内ゆうきさん

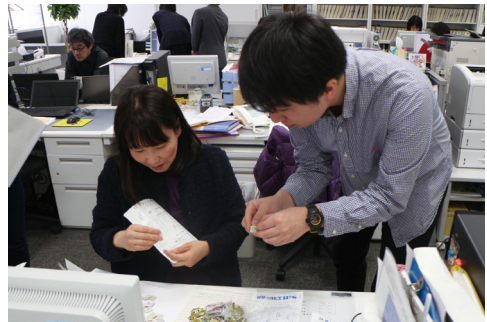
「最近、ファミマの近くに引っ越したんです。マークを集める態勢がばっちり整いました!」。開口一番、ベルマークネタで笑わせてくれました。

今年1月、担当するラジオの深夜番組でベルマーク収集を宣言。大分の小学生らが約1トンものアルミ缶を集めた、



という話題に刺激され、「自分も何かを集めよう」と考えた時に浮かんだのが、ベルマークでした。

10万点で憧れのトロンボーンを購入する計画でしたが、1人では膨大な時間がかかるうえ、個人では預金化できないことを知り、集めた分は被災地支援のため財団へ寄付しました。大なる勘違いをしていたものの、収集や財団の見学などを通じて様々な発見があり、ベルマークとの出会いに「運命的なもの」を感じたそうです。



「いろんな種類の商品にマークがついていることが意外で、宝探しのような楽しさがあった。切って貼る作業も、普段はする機会がないので工作的な面白さがある」。家族や学校、地域で取り組めば、人と人をつなぐ「コミュニケーションツール」にもなる、と言います。

ベルマーク預金で商品を購入すると価格の1割がへき地校などの支援に回ることも初めて知りました。一番驚いたのは、毎年17億円前後の預金が使われなまま繰り返されていることでした。

小中高の教員と保育士の免許を持つことから、教育ネタを織り交ぜた漫才も披露しています。相方の小林良行さんと、保育人材の育成や定着を支援する東京都の「とうきょうホイクマン」としても活躍。保育所を飛び回っています。

「ベルマークについても、まずは興味と関心を持ってもらうことが大切。ぼくの存在がそのきっかけになれば」「マーク集めだけでなく、使うこともPRしたい。使い道を知れば、集めることへの興味もさらにわくと思うんです」

ベルマークを題材にした漫才を作ったり、へき地の学校へ授業をしに行ったり。教育芸人兼大使として、いろんなことにチャレンジして運動を盛り上げたい、と夢を膨らませています。

倉光陽子さん

「どの商品にベルマークがついているのか知るところから、新鮮な気持ちでスタートしました」。豊橋市がベルマーク収集を開始した2016年4月、倉光さんも教育委員会に異動してすぐにベルマーク担当になり、まさに手探り状態で活動がはじまりました。

市役所の各課に回収箱を設置するほか、商工会議所を通じてマークやカートリッジを集めてくれる企業を募り、現在では162社(支店含む)が応援企業として登録しています。企業が集めたカートリッジは連絡がくると学校用務員が取りに行き、市役所に届けてもらう仕組みも確立しました。



市内の小中学校の設備をより充実させるために始められた活動でしたが、当初は市内のベルマーク参加校が半数にも満たない状態でした。校長会を通じて参加登録を呼びかけるとともに、毎年5・6月に行われるベルマーク運動説明会で、豊橋会場の発表者として収集をよびかけたり、広報誌「PTAとよはし」でベルマーク特集を組むなど、さまざまな方法で認知度を上げていきました。

同時に学校の負担を減らすため、「くすのき特別支援学校」と「庁内障害者ワークステーションわくわく」でマークを仕分け・集計する仕組みを軌道に乗せました。その結果、開始から2年半で240万点余りが集まりました。

「日常生活でベルマークに気づかず捨ててしまうのはとても残念なこと。市の活動がベルマーク運動を知ってもらうきっかけになれば」と倉光さん。毎年10月に開かれる「豊橋まつり」でもPRブースを出展、クイズやベルマーク商品の展示などを通じて大勢の来場者に収集を呼びかけています。

「必ずベルマーク付き商品を買わなければと縛られるのではなく、マークを見つけたら切って楽しく集める。それが5年後、10年後の未来を変えていくのだと思います」。

豊橋市の目標点数は「1000万点」。今後はテトラパック回収など新しいことにも挑戦しながら、地道にコツコツ続け、息の長い活動にしていきたいと意気込みを語ってくれました。

釜木尚美さん

大阪府摂津市立別府小で図書司書をしていた2010年、学校でインクカートリッジや石鹸のベルマークがたくさん集まることに気づき、本を買おうと、休眠状態だったベルマーク運動を復活させました。図書館に回収箱を置くと、子どもたちがマークを持ってきて、仕分けも手伝ってくれるようになりました。

任期満了で学校を去った13年以上も児童との共同作業は続き、昨年は過去最高の2万3100点、今年も1万3千点ほどが集まりました。

子ども主体の活動だけでなく、年1回発行するベルマーク便りもユニークです。昨年は「1年中見てもらえるものを」とカレンダーを作成。1年365日をベルマーク商品にちなんだ記念日にしてイラスト付きで紹介する内容で、コンクールで3度目の優秀賞に輝きました。

仕分け・集計の効率化、省力化にも工夫を重ねてきました。今年の神戸のベルマーク運動説明会では「切らない」「貼らない」の自らの実践を発表し、反響を呼びました。

「ベル・ブック」「ベルゾンなおみ」の名でツイッターでもベルマークをPRしています。マークの仕分けで悩むつづやきを見つくと、すかさずアドバイス。「おせっかいお婆さんですが、集めたマークは活用してほしいから」



かつては「ベルマークは非効率的」と感じる一人でした。でも、12年前、中越地震で被災した新潟県の学校へ財団が温風機を贈ったことを伝える記事と子らの笑顔の写真を見て、「ベルマークは子どもも気軽に参加できる社会貢献活動」と考えるようになりました。

ベルマークに否定的な意見をネットなどで目にするたびに、「正確な情報を伝えたい」との思いを強くします。そして、ベルマークがお母さんらの運動とみられがちな現状を残念がります。

「家族や地域のみみんなで取り組めるのがベルマークの良さ。説明会を土日にも開いて様々な人が参加できるようにしてほしい」と訴えます。「説明会でベルマーク商品の試食会のようなものも企画すれば、参加者も増えますよ」とも。

「一人でも多くの人に、ベルマーク集めは楽しくやれるということに気づいていただきたい。そのために頑張ります」

脇川雅之さん

「ベルマークが未来の子どもたちにとって欠かせないものになって欲しい」と話す脇川さん。毎年、ベルマーク運動説明会では多くの会場に参加し、発表校や他の協賛会社の話を熱心に聞く姿が印象的でした。「会場で聞いたさまざまな事例やアンケートに記入して頂いたご意見を、他の会場や学校訪問時にフィードバックできるように心がけてきました」。今後は大使同士で情報を共有し、お互いの活動や新たなアイデアを全国に伝えていきたいそうです。

ベルマーク大使としてまず取り組みたいのは「豊橋市の事例を全国に広げること」。特別支援学校の授業にマーク仕分けを取り入れるのは、PTA活動が難しくなってきた今の時代にマッチしており、特別支援学校と各学校、各市町村いづれにとっても有益な関係になれると考えています。「老人介護施設で集めているところもあり、ベルマークは世代を超えた共通言語になります。その魅力を伝えていきたい」といいます。

子供の頃からベルマークは身近な存在だったそうで、「点数が高いベルマークを見つけると嬉しくて、友達と競って集めていました」。

2006年、ワールドカップ観戦のために世界一周を旅した経験も、社会貢献への意識を高めるきっかけになりました。大勢の人と知り合って貧富の差を目の当たりにし、日本の豊かさを実感しました。その後、ラッキーベルに入社して被災地へ靴の寄贈なども行うなか、国内での経済格差にも気づき、さらにできる事があるのでは、と考えたそうです。「当事者意識を持って集めていく必要がある」と、社内でのマーク収集やウェブベルマークの活用にも力を入れていきたいと語って



くれました。

お子さんの通う幼稚園でもベルマークを集めており、「ベルマークを通じてすべての子どもたちが豊かな生活が出来るよう、ベルマークがあつてよかったと思われようように、大使として一端を担っていきたい」とやる気に溢れています。

「ベルマークの事なら脇川さんに聞けば分かると思っていただけのように、これから頑張ります」